國學院大學学術情報リポジトリ

日本民俗学における里山研究の課題と展望

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-12-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 新之輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001203

日本民俗学における里山研究の課題と展望

伊藤　新之輔

はじめに

日本の里山保全は現在岐路に立たされている。一九九二年の生産緑地法改正により指定された「生産緑地」が三十年の期限を迎えて一斉に解除され、それらの土地の宅地化が懸念されるという「二〇二二年問題」が発生し、各自治体がこの問題への対応を迫られたのである。その結果、希望者については「生産緑地」を「特定生産緑地」として延長することが可能となった。こうした緑地減少の問題が示唆される一方で、森林管理の問題が生じている。これまで地域の人々の手によって管理されてきた森林、特に「里山」と呼ばれる特性を持った土地の管理が滞る「里山放棄」の問題である。クマによる襲撃、イノシシやシカなどによる農作物の被害などを引き起こす遠因となるため、「里山放棄」の問題は農山村においてはすでに実害が出ているともいえる。こうした獣害が都市に及ぶのも、時間の問題で

あるといえよう。周知のように、里山は人の手が加わることによって生態系を保ってきたのであり、「里山放棄」によって在来の多様な生態系は失われてしまう。

たとえば、日本の里山を構成する重要な樹種の一つであるアカマツの生える林では、マツタケなどのキノコや山菜類が採れ、カタクリなどの植物が繁茂し、チョウをはじめとした昆虫、それを餌にする鳥類など、生物多様性に溢れる場所であった。明るい林床では、モチツツジやヤマツツジなどの低木類も生えており、晩春から初夏にかけて一斉に紅色や赤色の花を咲かせ、全山赤く燃えるという美しい景色が見られた。

こうした里山の情景は、しばしば伝説や昔話などの口承文芸のほか、泉鏡花の『龍潭譚』などの近代文学でも描かれているが、現在ではほとんどみられない景色になってしまった。これは「里山放棄」によって、アカマツ林が植生遷移して陰樹の繁る暗い林床の森になってしまい、低木類が育たなくなってしまったためである。こうして放棄された森林では、植物や生物の多様性が失われてしまうことが指摘されている。アカマツ林の里山については後述する。

里山を含めた森林やそこにある動植物の多様性を守るという問題は、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）においても課題とされているものである。そのうち、里山保全は目標15「陸の豊かさも守ろう」に該当する。ターゲットとしては、15–2「あらゆる種類の森林の、持続可能な形の管理をすすめ、森林の減少をくいとめる」や15–4「山地の生態系の能力を強めるため、多様な生物が生きられる山地の生態系を確実に守る」があり、現在日本国内において里山管理の抱える課題と直結する。さらに、人間の生活領域に自然をどのように配置するかという空間デザインの視点からは、目標11「住み続けられるまちづくりを」のターゲット11–7「２０２０年までに、特に女性や子ども、お年寄りや障がいのある人などをふくめて、だれもが、安全で使いやすい緑地や公共の場所を使えるようにする」も該当するといえる。日本人が里山の自然とどのようにかかわりあってきたのかを明らかにし、

それを世界に向けて発信することは国際的にも有意義なことであると筆者は考える。

さて、里山についての研究は、植物学などの自然科学の分野でのデータ収集や分析が行われているほか、人文科学においても自然と人間の交流に焦点を当てた研究が蓄積されている。特に、日本民俗学では、フィールドワークで得た知見をもとに人と自然の交流について多くの事例が報告され、検討が進められている。これについては、里山だけでなく、海や川なども研究対象とされたが、本稿では論点を明確にするため、里山について述べられた論考のうち、筆者の課題につながるものをとりあげて紹介する。その上で、どのような内容の里山研究を行うべきかを示すことを本稿の目的としたい。

一、日本民俗学の里山研究の成果と課題

日本民俗学における里山にかかわる研究のうち、民俗誌的研究によって、人々の自然に対する知識や生活のあり様を明らかにすることを研究の主題としているものが注目される。

「民俗誌的研究」とは、民俗学において特定の調査地を定めて詳細な調査を行うことにより、その地域の民俗のあり様を描く研究方法をさす。こうした方法を用いて、特定の地域における人間と自然の結びつきについて明らかにしていったのが環境民俗学を志す民俗学者たちであった[1]。これらの民俗学者による著作は、里山と人々のつながりをとらえる上で貴重な基礎資料となっている。ここでは、多数の編著作がある野本寛一と篠原徹の研究成果を紹介する。

（1）野本寛一

野本寛一はこれまで、自然にかかわる民俗研究についての業績を数多く発表し、環境民俗学ともいえる内容の研究を牽引してきた民俗学者の一人である。

『生態民俗学序説』[2]（一九八七年三月）は、六〇〇頁以上にわたって、自然と人間のかかわりについて考究した大著である。[3]本書では、主に動植物と人びとの暮らしのかかわりについて述べており、たとえば植物であれば、年中行事での利用、民俗知識（医療や呪術的利用）、食材としての利用についてフィールドワークで得た情報をあげて検討している。里山にかかわる記述は多くないが、植物分布帯の指標となる樹木をとりあげ、その植物と人とのかかわりについて述べた「第三章　植物分布帯指標植物と民俗」では、亜熱帯多雨林帯のアダンとクベ、照葉樹林帯のシイとカシ、夏緑広葉樹林帯のブナとナラをとりあげ、資材としての利用、年中行事や葬送儀礼での利用などについて、その詳細を明らかにしている。

ほかにも、「第七章　人為的遷移と民俗」では、人の手が加わることによって形成されている自然について述べ、長野県下伊那郡でのフィールドワークなどから山の民とトチが共生関係にあることや、焼畑地では木の移植などによって植物の人為的遷移を促してそれらの植物を合理的に利用したことを明らかにしている。また、「第八章　生態集中と民俗の生成」の「二　岩木山をめぐる民俗的生態集中」では、岩木山周辺の自然を主眼に置いた民俗誌を描いており、採草地としての利用や「山カケの情景」とその登拝ルートなど、景観論にかかわるような記述も散見される。

野本は『生態民俗学序説』以降も自然と人間のかかわりについて数多くの著作を発表している。里山に関連するものをあげると、たとえば『共生のフォークロア　民俗の環境思想』[4]（一九九四年四月）では、西日本をフィールドとしてアカマツの民俗をとりあげ、アカマツの燃料や用材としての伐採をめぐる伝承、マツタケ採取などでの技術伝承

を追っている。植物の民俗については『季節の民俗誌』[5]（二〇一六年七月）や『自然暦と環境口誦の世界』[6]（二〇二一年四月）で「自然暦」の伝承として植物の種類ごとに各地の伝承をあげている。植物に加えて雪や気象状況の伝承についても述べている。動物や昆虫の民俗については『生きもの民俗誌』[7]（二〇一九年七月）で種類ごとに各地の伝承をあげている。

（2）篠原徹

篠原徹は数多くの業績を残しており、野本寛一と並んで環境民俗学を率いてきた民俗学者である。『自然と民俗　心意のなかの動植物』[8]（一九九〇年四月）では、植物や動物の生業や食生活での利用について述べている。篠原論の特徴は「Ⅲ山村と民俗」で、岡山県蒜山地方の自然観について述べるのに際して図を示しているように、村人がどの程度その土地に生えている植物種を認識しているかを詳細に調査している点にある。篠原によれば、「村人は環境を二つの価値基準によって評価、分類しているように思われる。その一方は植物界に与えている民俗的分類、他方は地形・土壌など土地に対する評価を表わした民俗的分類である」[9]と分析し、植物種ごとに具体例をあげている。植物の種類を詳細に捉えていく調査方法はその後も続けられており、『海と山の民俗誌』[10]（一九九五年二月）では、植物民俗の地域差を述べるにあたり、「民俗と相関をもつと思われる植生モデル」を図示し、日本の森林は混交林（雑木林）が常緑広葉樹林から落葉広葉樹林の低地に広く展開していることが特徴であることを指摘しており、ここでの「雑木林」は里山と同義であるといえる。「九州から東北まで雑木林は広がり、それは人と自然の関係で歴史的にできあがったものであろう」[11]と想定し、日本の雑木林は面積が大きく、かつ人の生活場所との距離とも近く、野生植物利用体系の民俗学的な問題を考える上で意味が大きいという。また、カシ林のムラとナラ林のムラの環境と

のかかわり方を比較するなど、植物種（植生）によって文化の類型化を試みているのも篠原論の特徴といえる。これは、『講座日本の民俗学4環境の民俗』[12]（一九九六年一一月）の「植生と民俗」でも示されている論点であり、たとえばサカキとヒサカキなどの植物の分布と植物を使う民俗の分布を対照させる必要性を指摘している。

以上のように、野本と篠原による民俗誌的研究においては、各地でのフィールドワークで得た特定の地域内での動植物と人間の生業のかかわりについて、フィールドワークで得た知見をもとに述べたものが多くを占めている。これは里山研究をする上での基礎資料として有用である。こうした資料に基づいて、篠原徹が行った植物と民俗の分布の比較対照や植物種による文化の類型化の試みも注目される。

一方で、鳥越皓之らによる村落空間の研究における里山への言及も注目される。こうした研究では、野本や篠原と同様に民俗誌的研究を行いつつ、村落空間において里山がどのような位置にあるのかを示し、人びとの暮らしと里山空間とのかかわりについて述べている。つまり、里山などの村落空間の持つ性質を明らかにすることを研究の主題としている。里山研究に限らず、村々の景観を切り口にして民俗を捉えようとする研究は、村落空間論・領域論的研究と言い換えることができ、一九八〇年代に日本民俗学をはじめ社会学・人類学・中世史学の領域などでも盛んに行われた[13]。むろん、里山をコモンズとしてとらえなおす研究動向ともつながっており、様々な指摘があるが、ここでは福田アジオ、宮家準、鳥越皓之、千葉徳爾の四名の民俗学者の成果を紹介することとしたい。

（3）福田アジオ・宮家準

福田アジオは『日本村落の民俗的構造』[14]（一九八〇年三月）で、ムラの領域をムラ―ノラ―ヤマと三分類し、同心

円的構成を持つことを示した。ムラ―ノラ―ヤマの同心円的構成モデルはその後の村落空間論的研究に大きな影響を与え、これを基盤として展開していった。

また、宮家準は『生活のなかの宗教』[15]（一九八〇年一〇月）で、他界の空間的位置の整理を行い、次のように述べている。

山岳の他界につらなる峠や丘、海上他界との境界である浜・岬、天上の他界へとのびている木、地下の他界への入口の洞窟というように、他界とこの世との間の境界をなす空間 liminal space が、祭が行なわれたり、そこから他界の神霊が出現する場所として、重視されているのである。[16]

山岳の他界につらなる峠や丘は里山空間とも一致する。ここで重要なのは、liminal space というように、あの世とこの世の境界が線や点でなく、空間的広がりを持っていることを指摘したことにある。

（4）鳥越皓之

野本寛一と篠原徹らによる環境を主題とする研究の進展を受け、鳥越皓之は『試みとしての環境民俗学―琵琶湖のフィールドから』[17]（一九九四年二月）において「環境民俗学」を提唱する。[18] 鳥越の研究のうち、人びとによるサクラの植栽と管理、それによって形成された景観についての研究が里山研究にあたるといえる。『講座人間と環境第4巻景観の創造―民俗学からのアプローチ』[19]（一九九九年九月）において、鳥越皓之は人々によるサクラの植栽とそれによって形成された景観とのかかわりについて述べており、その成果は『花をたずねて吉野山―その歴史とエコロジー』[20]（二〇〇三年二月）で一冊にまとめられている。花見をする里山の研究については後述するため、ここでは書名の紹介に留めておく。

なお、『講座人間と環境第4巻景観の創造』では、そのほかにも里山の景観について述べられており、特に古川彰

による「第3章　山里の景観」が注目される。古川は、一九五〇年代と一九九八年の山村の景観を写した写真を掲げ、管理の行き届かなくなった森林は一見豊かな森に見えるが、土を掘って確かめると保水力が衰えているなど、実態は森林の外見とは異なることをフィールドワークでの経験を踏まえて次のように述べている。

熱帯雨林の減少などがしきりに語られて、森の減少＝環境破壊という印象が強いために、逆に木が増えれば自然が回復しているという通念ができてしまっているように思える。ところが私たちの周りの山林は長いあいだ人が利用しながらつくりあげてきた自然であり、手を抜くと木は増えても元の自然にもどるのではなく、荒れた山林になってしまう。荒れた山林は人が利用できないだけでなく、保水力をはじめとする山林の本来の機能さえも衰えさせるのである。[21]

具体的な民俗から述べたこの指摘は重要であり、燃料革命による炭焼きの終焉、林業の崩壊、高度経済成長による都市への人口流出と通勤兼業化などによる暮らしの大きな変化がこうした状況を生み出したという。そして、日本の山里（里山と言い換えることができる）の景観の歴史的変遷について概観し、戦前期には草山が各地でみられ、明治・大正期には刈敷や肥料として草が利用され、火入れによって維持されていたという土屋俊幸の研究成果を引用している。[22]金肥の普及や火入れの規制の厳格化、木炭や用材に使用する林業的利用が進展したことなどにより、一九二〇年代からは徐々にこれらの草山が減って木炭用の林地へと転換した。燃料革命により一九五七年頃から木炭生産が急減したことに伴い、用材林への転換が進み、昭和三〇年代後半以降には多くの地域でスギやヒノキの生える山里の景観が出現したといい、「私たちが山村にたいしてもっている景観的イメージは、戦後になってからつくりだされたものなのである」[23]とし、愛知県東加茂郡旭町（現豊田市）の景観の変遷を追い、同様の変遷を辿っていたことを確認している。

鳥越皓之は、『環境社会学―生活者の立場から考える―』[24]（二〇〇四年一〇月）においても、山里の人々が里山保全を担ってきたことや、日本は原生林よりも人の手が加わって形成された「天然林」（二次林）が多いことなどをあげ、日本の森林は「保全」と「利用」がポイントになると主張している。また、吉野山のサクラの景観についても触れている。『歴史・民俗からみた環境と暮らし』[25]（二〇一四年三月）では、鳥越論のこれまでの総括ともいえる内容が示されており、福田アジオの領域論を環境利用の側面から考えていく必要性を説いている。そして、「里山は自然の持続的利用を背景とした自然と調和した農耕生活の場であったというのは、あまりに現実と乖離した認識である」[26]と環境史のあり方について述べ、時代により里山の扱いや位置づけが異なっていたことを問うことの必要性を指摘している。

（5）千葉徳爾

千葉徳爾は、はげ山をめぐる研究を行っているが、これは森林資源が枯渇した里山の研究と言い換えることができる。『はげ山の研究』[27]（一九五六年一〇月）および『はげ山の文化』[28]（一九七三年）では、人為的荒廃林地（はげ山）の植生や分布、どのようにはげ山が形成されたかなどを述べている。はげ山化している地域で一般的な林相がアカマツ林であったため、林学者の本多静六らによる「赤松亡国論」のようにアカマツとはげ山の関連性が指摘されていたが、千葉は科学的数値や史資料の記述をあげ、これは瀬戸内海沿岸地域に限られたことであることを示し、むしろ林地が回復していく植生遷移の過程でアカマツ林が発達していることを指摘した。

以上のように、村落空間の研究においては、里山という空間に注目し、その空間の持つ性格や里山自体の歴史的変遷と人々の生活の変遷を照らし合わせた研究が行われている。

二、里山研究の課題

日本民俗学で行われた里山研究の課題を述べたい。

まず、資料間の比較検討を行う必要性である。たとえば、野本や篠原の研究においては、里山などの自然に関する資料の羅列に留まり、俯瞰的な視野からの分析などが不十分である。『生きもの民俗誌』の「あとがき」で野本が自ら述べているように、同書ではフィールドワークで得た各地の資料の提供が主な内容となっており、「確固とした結論[29]」が示されているわけではない。しかし、野本による資料提供は環境民俗学の基盤を支える重要な情報であり、今後はこうした資料群を整理し、分析していくことが求められるのである。

野本は『講座日本の民俗学4環境の民俗』で、改めて環境民俗研究に対しての立場を表明しており、民俗学で行われているような、ムラやマチを単位とした「生活誌的・民俗誌的研究」と特定の主題を設定して日本全国をフィールドとする「テーマ主義的な研究」のそれぞれの流れが環境民俗において採用されてもよいという。前者の研究がベースとなって先行すべきであるが、一方で研究の鳥瞰性や比較的視点・文化論的展開も重要であるとも述べている。この点は、篠原徹が検討したように、特定の植物種による文化の類型化は俯瞰的な視点も持ち得るものであろうが、やはり特定の地域を対象としての検討に留まっており、いわばいくつかの「点」を示したに過ぎない。野本や篠原らの問題提起によって、自治体誌の民俗編などでも、環境民俗学的な調査報告がなされるようになったといえるが、こうした資料群を整理して分布図を作製し、文化の類型を地図上に示すという、「点」を「面」にしていくという作業は等閑視されている。

次に、里山景観の歴史的変遷を通史的にみていく必要性である。里山の景観の歴史的変遷を追う研究は、歴史学や

考古学などで進展しており、さらなる深化が期待される。たとえば、笹生衛の『神仏と村景観の考古学―地域環境の変化と信仰の視点から』（二〇〇五年七月）、水野章二の『中世の人と自然の関係史』（二〇〇九年三月）や原田洋・井上智の『植生景観史入門』（二〇一二年四月）、小椋純一の『森と草原の歴史――日本の植生景観はどのように移り変わってきたのか――』（二〇一二年四月）、水野章二の『里山の成立―中世の環境と資源』（二〇一五年九月）、時枝務の『山岳霊場の考古学的研究』（二〇一八年八月）などがあげられる。民俗学としては、古川がしたような特定のフィールドでの里山環境の変遷について詳細な事例調査を行い、里山の変遷とその周辺地域に住む人々の生活史の具体像を捉えていくことに併せて、こうした史資料を用いた通史的な里山景観の変遷を辿っていく必要があろう。鳥越皓之が指摘したように、里山の歴史においては必ずしも自然と人間が調和していた時代ばかりではないことがポイントとなる。

そして、宮家準があの世とこの世の境界空間のモデルを示したように、里山空間や景観の伝承を生業などの日常生活の面だけでなく、日本人の霊魂観や死生観といった宗教生活の面からもみていく必要性である。宮家が指摘したように、里山が死者霊の集まる場所とされる伝承や、死者への供養を行う場としての伝承例は実際にみられるが、これまでの日本民俗学における里山研究においては、こうした宗教（信仰）的空間としての検討は等閑視されている。

これに加えて、花見遊山の場としての里山空間の検討も進めるべきである。前述のように、鳥越皓之は『花をたずねて吉野山―その歴史とエコロジー』において、吉野山にサクラを植える人々と花の文化について論じ、吉野山の花の名所としての成立や近現代におけるサクラ保全活動などの歴史的変遷も追っている。そして、鳥越は自然を「原生的自然」「使われた自然」「愛でられた自然」に三分類している。鳥越は「愛でられた自然」の概念をふまえて、吉野山が「人間と自然との深い交流の場となっていった」[30]ことを指摘し、人びとが千年以上かけてつくりあげてきた「愛でられた自然」の意味と価値を「原生的自然」とは異なる視点から評価し直すべきであると説いている。

以上のように、日本民俗学では、自然を生業などに用いる「使われた自然」としての検討が盛んに行われている一方で、「愛でられた自然」の研究はあまり活発に行われていない。里山研究においても、里山の資源を生産生業や日常生活に利用するといった「使われた自然」の検討だけでなく、「愛でられた自然」とは少し意味が異なるかもしれないが、物見遊山をする娯楽的空間や死者供養を行う宗教（信仰）的空間としてとらえ直していく必要があるのである。

三、アカマツ林とツツジ

以上の課題をふまえて、筆者が考えている里山研究の展望を述べたい。

そもそも、「里山」はどのような意味としてとらえられているのであろうか。環境省によれば、「里地里山とは、奥山と都市の中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原等で構成される地域概念」[31]であるという。同じく環境省によれば、里地里山は国土の約四割を占めているといい、その骨格となる二次林のタイプによって、次のように五タイプ六ブロックに区分されるという。

・北海道にみられる「シラカンバ二次林などを中心とした里地里山」（放置すると、やがて自然林に代わっていく）

・道南から東北地方日本海側から新潟県・長野県にかけて広がる「ミズナラ二次林を中心とした里地里山」（放置すると、やがてブナなどの自然林に代わっていく）

・東北地方太平洋側から静岡県にかけて広がる「コナラ二次林を中心とした東日本の里地里山」（人口が密集していて開発が多く、タケ・ササの繁茂が目立つ）

・石川県から島根県にかけての日本側の地域に広がる「コナラ二次林を中心とした西日本の里地里山」（人口密度が低く、雪のやや少ないところではタケの繁茂が目立つ）

・愛知県から近畿地方と瀬戸内地域を経て山口県へかけて広がる「アカマツ二次林を中心とした里地里山」（人口が密集しているが、ため池なども多く、希少種も多い。開発やマツ枯れ、タケの繁茂の問題がある）

・紀伊半島から四国地方南部を経て九州地方にかけて広がる「シイ・カシ萌芽林を中心とした里地里山」（タケが繁茂しなければ、やがてシイ・カシの自然林に移行する）[32]

筆者は、このうち「アカマツ二次林を中心とした里地里山」を研究対象としてとりあげたい。

森林生態学者の四手井綱英や農学者の養父志乃夫らによる里山についての自然科学系の研究書や一般書においては、アカマツ林の里山について多く述べられているのに対して、千葉徳爾の研究を除けば、日本民俗学の里山研究ではアカマツ林をとりあげた研究が十分に行われているとはいえない。換言すれば、自然科学系の業績を活用してアカマツ林の里山について論じることが可能ということであり、前述のように、歴史学や考古学などの人文科学系の業績も活用することができる。

アカマツ林は日本の里山を代表する樹種であるが、冒頭で述べたように、その景観は近年大きく変化している。そして、アカマツ林で構成される里山は西日本に多くみられ、ヤマツツジやモチツツジなどのツツジ科の植物が一斉に咲いて里山の美しい景観を形作っていた。有岡利幸はこうした景観について次のように述べている。

中国・近畿地方の里山の松林は、昭和三〇年（一九五五）あたりまでは別名ツツジ山といえるほど、松とツツジが生育していた。モチツツジ、ミツバツツジ、コバノミツバツツジ、ヤマツツジ、ミヤコツツジなどの野生ツツジである。

（中略）

ツツジの開花は美作地方の花見、大和地方のダケのぼりに見られるように、これから始まる農作業の合図だった。同時に、山から帰るときにはツツジの花を折りとって、田の水口に立てる行為を伴っていた。春先の山でピンクの花を開くツツジの花は、山の精気と見られた。松山の樹下でここかしこ、こちらも向こうもと山一面を鮮やかに彩るツツジの花とその蕾は、豊かな稔りの穂を垂れる稲を想像させる。ツツジの花を水田に移すことは、里山が育んだ山の精気を田へと運ぶ行為であり、秋の豊穣を祈るためのものだった。山の精気は、いわば山の神そのものであり、ツツジの花は山の神が田の神へとその守護する対象を移していくときの憑代とされていたのである。[33]

こうした記述から、アカマツ林の里山でツツジの花が咲く様子が美しかったことは容易に想像される。農作業の合図であるという伝承などから、ツツジの花を田の神の「憑代」（依代）とする解釈は検討の余地はあるものの、野本寛一らが示したように、ツツジの咲く時期を生産生業の節目とする伝承は各地でみられるのである。

現在、「里山放棄」による植生の変化により、こうしたツツジの咲き誇る里山を見ることは難しいが、かつての里山の景観を記憶に留めている方はおられる。

たとえば、兵庫県加西市では、一九七〇年頃までこうした景色がみられたという。法華山一乗寺の門前町にあたる坂本町に長く住むKさん（昭和一九年生）は、卯月八日（新暦の五月八日）の季節にはどの山も真っ赤で、五月六日にこのヤマツツジの花を摘んでシャシャキ（ヒサカキ）と束ね、竹竿の先に括りつけて前栽に高く掲げ、仏壇には「薄い色では仏さんにいけない」といってヤマツツジの赤い花を供えたと、卯月八日頃に幻想的な景色が広がっていたことを懐かしみながら話してくださった。[34]

このように卯月八日にツツジの花を門先に高く掲げたり仏壇に供えたりする伝承は、近畿地方を中心に分布して

おり、その日行われる習俗から、ツツジの花は「死者への供花」と解釈することができる。[35]

また、有岡利幸は幼少期に経験した花見の光景を次のように回想している。

岡山県東北部の美作台地とよばれるところで生まれた筆者も、四月三日の月遅れの雛まつりには花見といって、母親に弁当をつくって貰い、近くの小山に行って、ツツジの花を眺めながら遊んだ記憶がある。したがって花見とは、ツツジの花を見ることだと長い間思い込み、桜花を見ることが花見であることを中学生になる頃まで知らなかった。筆者が子供のときのツツジの花見には、村の人は一緒でなく、筆者と弟妹だけであった。ツツジの花の枝を折って帰ったことは、覚えている。[36]

現在、「花見」といえばサクラの花見を想像する日本人は多いと思うが、幼少期の有岡は四月三日の民俗的経験から、花見をツツジの花見ととらえていたのである。「花」といわれてツツジを想像する感覚は珍しいものではなく、近畿地方においては「花より団子」という諺の「花」とは、ツツジを意味していること[37]を例としてあげられる。

こうした花見が行われる場所について、管見の限りでは、上巳節供の花見習俗について全国の状況を論述したものはみられないが、卯月八日の花見については筆者が「卯月八日の花見[38]」で述べたように、花見を行う場所は高いところが好まれ、老若男女が訪れることのできる開放的な場であり、その場所は卯月八日に死者霊（およそ死後三年以内の死んで間もない死者の霊）が集まるといわれる場所という特徴を持つ。さらに、花見が死者供養の一連の行事の中に含まれていること、一連の行事の構造が類似していることから、青森県と岩手県、群馬県、兵庫県で行われる卯月八日の花見は死者と生者の交流を目的として行われるという解釈が可能である。卯月八日に花見を行う場は集落周辺の小高い山や山の中腹であることが多く、これは集落との位置関係から、里山での花見といってよい。ここから課題として提示できるのは、里山での花見においては生者と自然に加えて死者霊との交流が行われるという点である。

鳥越皓之は人びとの手によってサクラの山となった吉野山を「人間と自然との深い交流の場となっていった」[39]といったが、ツツジの花見が行われる里山は、少なくとも卯月八日には人間と自然のほかに死者霊との交流の場になっているということである。視点を変えれば、里山のツツジの花が死者と生者を結びつける役割を持っているともいえる。

以上のように、ツツジの花見について卯月八日研究の成果から述べることは可能であるが、各地で行われた里山でのツツジの花見習俗の史資料を集積して比較検討することに加え、文学、昔話や伝説などの口承文芸のなかでどのようにツツジの花が登場し、ツツジの咲く里山がどのような空間として描かれているかなどを確認していく必要がある。また、日本各地の里山保全活動において、どのようにツツジを管理しているかなどの実態を明らかにすることも含め、アカマツ林やツツジの咲く里山をめぐる歴史的経緯を明らかにしたい。

おわりに

本稿では、日本民俗学における里山研究の成果を紹介し、その課題を述べ、筆者の業績を引用しながらアカマツ林で構成される里山でのツツジの花見習俗やツツジの花が咲く里山の研究に際しての課題を提示した。

里山をめぐる景観は人と自然の交流の中で形成されてきたものである。アカマツ林の里山においては、燃料や肥料などの資源獲得という人間の一方的な利益のみでなく、それによって明るい林床が保たれ、そこでは多様な動植物が育まれた。里山の自然が農業、食生活などの人間の日々の暮らしを支えた一方で、人間は里山の自然の保護にも寄与していたということである。むろん、鳥越皓之が指摘したように、この関係が成り立たなかった時代もあったのであり、森林資源が枯渇した森林の景観としてのアカマツ林もみられた[40]。美しいアカマツ林の景観や、多様な動植物の

保全、マツタケの収穫などは、人びとによる適度な里山管理によってもたらされるのである。

日本民俗学の里山研究では、生業や生活上必要な資源を獲得する場としての検討は盛んに行われたが、人びとと死者霊が交流する宗教（信仰）的空間、あるいは花見を楽しむという行楽的空間としての検討は進んでいない。花見の多義性を考えるうえでも、民俗学的方法によって里山を宗教（信仰）的空間または行楽的空間としてとらえなおしていく必要があろう。

註

（1）環境民俗学の視点については、伊藤廣之の「環境民俗学の視点と河川漁撈研究」（『大阪歴史博物館研究紀要』第一三号、大阪歴史博物館、二〇一五年二月）および山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学――新しいフィールド学へ』（昭和堂、二〇〇八年一一月一〇日）などを参照されたい。

（2）野本寛一『生態民俗学序説』白水社、一九八七年三月二〇日

（3）野本は、大井川流域の民俗調査を重ねるうち、「民俗現象を「自然と人間のかかわり」という原点にさしもどして見つめ直してみなければならないと考えるようになった。それは生態学的な視点から民俗文化を見つめ直すことにほかならない」といい、「生態学を人文科学と結びつけ、ときに止揚するという点で、これまで日本民俗学は必ずしも積極的であったとは言えない」と述べ、日本民俗学に動植物にかかわる研究の膨大な蓄積があることを指摘した上で「生態民俗学」的な視点で学び直すことの意義を説いている。「生態民俗学」とは、民俗学を学の主体とした「生態学的な視点に立った民俗学」「生態学的な着眼・発想による民俗現象の研究」と定義

している。そして、「自然環境、人為的環境、環境への適応、環境変革などを包括した「環境民俗学」が将来において成立する可能性は充分にある。そしてその場合、「生態民俗学」が主翼となることはまちがいない」と、立場を明確にしている。

(4) 野本寛一『共生のフォークロア　民俗の環境思想』青土社、一九九四年四月一五日

(5) 野本寛一『季節の民俗誌』玉川大学出版部、二〇一六年七月二五日

(6) 野本寛一『自然暦と環境口誦の世界』大河書房、二〇二一年四月二〇日

(7) 野本寛一『生きもの民俗誌』昭和堂、二〇一九年七月三〇日

(8) 篠原徹『自然と民俗　心意のなかの動植物』日本エディタースクール出版部、一九九〇年四月二五日

(9) 前掲（8）二〇七頁

(10) 篠原徹『海と山の民俗誌』吉川弘文館、一九九五年二月一〇日

(11) 前掲（10）二四七頁

(12) 野本寛一・福田アジオ編『講座日本の民俗学4環境の民俗』雄山閣、一九九六年一一月二〇日

(13) 景観についての研究史は、松崎憲三「景観の民俗学―山麓農村の景観―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第四集、国立歴史民俗博物館、一九八四年三月）、中山正典「暮らしと生業の空間」（野本寛一・福田アジオ編『講座日本の民俗学4環境の民俗』雄山閣、一九九六年一一月二〇日）などを参照されたい。

(14) 福田アジオ『日本村落の民俗的構造』弘文堂、一九八〇年三月二〇日。なお、ムラ―ノラ―ヤマの領域論は「村落領域論」（『武蔵大学人文学会雑誌』一二巻二号、武蔵大学人文学会、一九八〇年一二月）が初出。

(15) 宮家準『生活のなかの宗教』（NHKブックス376）日本放送出版協会、一九八〇年一〇月一日

(16) 前掲（15）三八頁
(17) 鳥越皓之編『試みとしての環境民俗学―琵琶湖のフィールドから』雄山閣、一九九四年二月
(18) 伊藤廣之は「環境民俗学の視点と河川漁撈研究」（前掲（1））において、「野本寛一の生態民俗学がいわば実体論的な捉え方であり、篠原徹の民俗自然誌がいわば人間を主体とした認識論的な捉え方であったのに対し、鳥越の環境民俗学は、生活のなかの所有権や暮らしのルールといった、人びとの生活の立場とのかかわりから自然と人間の関係性を捉えようとするものであった」（五五頁）と、三者の環境の捉え方は異なっていたことを指摘している。
(19) 鳥越皓之「序章　花のあるけしき」鳥越皓之編『講座人間と環境第4巻景観の創造―民俗学からのアプローチ』昭和堂、一九九九年九月二〇日
(20) 鳥越皓之『花をたずねて吉野山―その歴史とエコロジー』（集英社新書〇一八二D、集英社、二〇〇三年二月一九日
(21) 古川彰「第3章　山里の景観――矢作川流域にみる人びとの暮らしと山村の変化」前掲（19）七〇頁
(22) 土屋俊幸「山村」『日本村落史講座三景観二』雄山閣出版、一九九一年、一八一～一九七頁
(23) 前掲（19）七四頁
(24) 鳥越皓之『環境社会学―生活者の立場から考える―』東京大学出版会、二〇〇四年一〇月二六日
(25) 鳥越皓之「農用林としての里山と暮らし」群馬歴史民俗研究会編『歴史・民俗からみた環境と暮らし』（岩田書院ブックレット歴史考古学系H18）、岩田書院、二〇一四年三月
(26) 前掲（25）四六頁

(27) 千葉徳爾『はげ山の研究』農林協会、一九五六年一〇月。増補改訂版がそしえてより一九九一年三月一五日に刊行されている。

(28) 千葉徳爾『はげ山の文化』学生社、一九七三年

(29) 前掲（7）六六五頁

(30) 前掲（20）一七八頁

(31) 環境省「里地里山パンフレット」二〇〇四年九月、二頁。環境省ホームページで公開されている（https://www.env.go.jp/nature/satoyama/pamph/all.pdf　二〇一三年九月三〇日閲覧）。

(32) 前掲（31）三頁の内容を筆者が整理した。

(33) 有岡利幸『里山Ⅱ』法政大学出版局、二〇〇四年三月一日、一九三～一九四頁

(34) 筆者調査。二〇一五年八月十九日、二〇一六年三月二日、兵庫県加西市坂本町。なお、アカマツ―モチツツジ群落は「加西市では最も広く分布して」おり、坂本町が位置する「南部ではマツ枯れにより、壊滅的な状況である」（加西市史編さん委員会編『加西市史』第三巻本編3自然、加西市、二〇〇二年九月一〇日、三三七頁）というが、「加西市史第三巻付図3　加西市現存植生図」をみると、近年でも坂本町周辺はアカマツ―モチツツジ群落に囲まれている。「里山放棄」により、林床が暗くなった結果、以前のように多くのツツジの花が咲くことがなくなったためであろう。

(35) 伊藤新之輔「卯月八日の竿花―天道花習俗の分布と伝承内容―」『伝承文化研究』第一八号、國學院大學伝承文化学会、二〇二一年六月二〇日。具体的には、近畿地方（滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県）、福井県、三重県伊賀地方、香川県、徳島県、岡山県東部、瀬戸内海の島々（岡山県・香川県）、山口県、福岡県

筑後地域、対馬、佐渡島、長野県中南部、静岡県西部で分布が確認できる。

(36) 前掲(33)二四～二五頁

(37) 伊藤新之輔「「花より団子」とツツジの花見」『東アジア文化研究』第七号、南開大学外国語学院東アジア文化研究センター「東アジア文化研究」編集委員会、二〇二二年二月二〇日

(38) 伊藤新之輔「卯月八日の花見」『國學院大學大學院紀要―文学研究科―』第五四輯、國學院大學大学院、二〇二三年二月二八日

(39) 前掲(20)一七八頁

(40) 前掲(27)および(28)。前述のように、アカマツは森林資源が枯渇した里山において、植生遷移の過程で林立していくのであり、放置していればカシやシイなどの照葉樹林へと遷移していくのであるから、アカマツ林は森林が復活していく過程にあるといえる(石井実・植田邦彦・重松敏則『里山の自然を守る』築地書館、三四～三七頁)。

〔付記〕本稿は國學院大學研究開発推進センター「〈ＳＤＧｓ〉と建学の精神」研究事業の成果の一部である。